

# 下三栖遺跡

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



写真1 上空から見た調査区 (写真上が北)

はじめに <sup>しもみす</sup>下三栖付近は今、最も変わりつつある地域のひとつです。1993年より油小路通の延長にともなって工事が始まりました。

遺跡の範囲は大手筋通・外環状線・国道1号線・東高瀬川に囲まれ、宇治川の北岸にあたります。また、昭和になって干拓された<sup>おぐら</sup>巨椋池の北側に位置します。ここは当初、室町時代の遺跡である「下

三栖城跡」として周知されていました。

1996年の立会調査で、古墳時代の高杯を含む土器類を多数発見したのがきっかけとなり、「下三栖遺跡」として新たに認知されました。その後の調査の結果、弥生時代から近世に至る土器や遺構の相次ぐ発見で、重複した集落遺跡であることがわかりました。

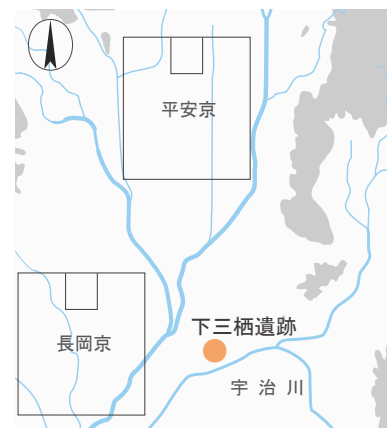


図1 調査地の位置



写真2 1996年の調査 奈良時代の竪穴住居跡



写真3 1998年の調査 中世以前の断面観察



写真4 1999年の調査 古墳時代後期の竪穴住居跡



写真5 1999年の調査 鎌倉時代後半の土壙墓

**1996年の調査** 奈良時代の竪穴住居跡（写真2）や、鎌倉時代の建物跡・井戸・溝などを発見しました。柱穴のひとつからは、地鎮に使われたと思われる銭貨が出土しました。

**1997年の調査** 立会調査で奈良時代と、平安時代後期から室町時代の溝を確認しました。溝には古墳時代の円筒埴輪や製塩土器の破片が多数混入していました。また、古墳時代中期の須恵器杯蓋を含む土壙も確認しました。

発掘調査では、調査区東半部で中世から近世の流路、西半部では鎌倉時代後期の柱穴群・井戸・土壙・溝などを多数発見しました。

**1998年の調査** 中世と平安時代

の遺構のほかに、断面観察で古墳時代後期、飛鳥・奈良時代の遺構を確認しました（写真3）。河川跡では弥生時代から古墳時代前半期の土器も出土しました。

**1999年の調査** 古墳時代後期の竪穴住居跡が2棟見つかりました（写真4）。同時期の土壙墓からは、副葬品と思われる須恵器杯の蓋と身が、ほぼ完全な形で複数出土しました。また、奈良時代・鎌倉時代の建物跡が10棟、井戸・土壙、周囲を区画する溝、鎌倉時代後半の土壙墓を1基検出しました。その中から大量の土器と共に銭貨・刀子、おそらく木棺に使ったであろう鉄釘10数本が出土しました（写真5）。

**まとめ** これまでの調査結果から、古墳時代後半には調査地付近から東側に、奈良時代には西側へも集落が広がっていたことがわかりました。一時期、自然流路などにより途切れますが、平安時代後半から中世前半には再び盛んに開発が行なわれ、人々が活発に生活した様子がうかがえます。その後、生活の場が他に移り、このあたりは耕作地として活用されはじめたものと思われます。

一連の工事にとまらぬ調査は今回で終了しますが、下三栖遺跡の範囲はさらに拡大するものと考えられるため、これからも周辺の調査が望まれます。

（近藤 章子）